ローマ人への手紙第八七回質問

1　こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

2　なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。

3　肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。

4　それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。

（ロマ八章一―四節／新改訳2017）

（問一）四節の「律法の要求」とは何を意味しますか。二つを挙げて説明して下さい。

（問二）四節でキリスト者のことを「肉に従わず御霊に従って歩む私たち」と表現しています。なぜキリスト者はそのように表現されるのですか。

クリスチャンの救いのゆるぎなさ

（ロマ八章四節）

わたしたちクリスチャンは、今どんなに確かな救いにあずかっているのかということを知らなければなりません。そのことがわかると、わたしたちの信仰生活は安定したものとなり、ゆるぎなきものとなって、主のために心から進んで奉仕することができるようになります。ですから、このことを確

かなものとするまでは、本当に力強い信仰生活を歩むことはできないでしょう。

わたしたちが今学んでいる個所は、このクリスチャンの救いの確かさについて、はっきりと教えています。きょうは四節を学びたいと思います。四節は一節から続いてきている文章であることを、もう一度しっかりと覚えておきたいと思います。一節では、クリスチャンはもう絶対に断罪されることがないと断定して、その理由として、二節で、「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の原理が、罪と死の原理から」解放し、自由にしたからだと述べました。この二節を受けて、三節では、その理由として、神がなしてくださったことについて述べ、四節では、その神の御業の目的としておられた成果について述べています。このように見てきますと、ここで述べていることの真意がはっきりすると思います。

ここで「律法の要求すること」と言われているものが何を指すかということは大切なことで、これを、「律法の要求している義」だけだと見ると、ここで言われている真意が半減してしまうだけでなく、間違った考え方になっていってしまいます。というのは、わたしたちクリスチャンが「御霊に従って歩」けば、完全に聖くなりうるのだという教えが出て来るからです。

「律法の要求すること」とは、三節で「神はしてくださった」ことにほかなりません。それは、二つあって、キリストが神の律法に対して完全に服従することによって、義を全うされたということと、もう一つは、律法が罪人に要求する罪

の刑罰を、わたしたちに代わってキリストが十字架上で受けてくださったことです。この二つのことを、神はキリストによってしてくださったのです。神の律法が要求していたことは、実にこのことだったからです。ですから、キリストに結びつけられたクリスチャンにとって、律法の要求していることは、完全に満たされたわけで、ここにおいて、「肉に従って歩かず、御霊に従って歩くわたしたち」と言われているのは、わたしたちクリスチャンということと同じです。

ここで、クリスチャンとか、「キリストにある者」と言わないで、「肉に従って歩かず、御霊に従って歩くわたしたち」というような言い方をしているために、しばしば誤解をする人々がいます。それは、肉的クリスチャンと霊的クリスチャンがあって、御霊に従って生活しているかぎり、律法の要求しているとおりの生活ができると解釈する人々がおります。また、御霊に従って生活することにより、完全に聖くなると解釈する人々もおります。しかし、このように解釈する人々は、今述べたように、「律法の要求すること」を「律法を守ること」だけに限定して解釈しているわけで、これにはもう一つの律法を破る者に対する刑罰の面が見落とされてしまっている間違いを犯しています。

しかし、それだけでなく、ここで「肉に従って歩かず、御霊に従って歩く」と言っていることを誤解しているようです。確かにコリント教会への第一の手紙三章の初めの個所では、霊的クリスチャンと肉的クリスチャンとの区別があって、成長したクリスチャンと未成熟のクリスチャンがいることにつ

いて言及しています。しかし、わたしたちが今学んでいるこの個所では、クリスチャンにそのような二種類の人々がいることなど、全く暗示さえもされておりません。この八章では、この四節に続く個所で御霊に従う者を、肉に従う者との対比において、次のように説明されています。

「というのは、肉に従う者たちは、肉のことを考え続けるが、御霊に従う者は、御霊のことを思い続ける。肉の思いは死であるが、御霊の思いはいのちと平安とだからである。というのは、肉の思いは、神に敵対することだからである。それは、肉が神の律法に服従せず、服従することもできないからである。肉にある者は、神を喜ばせることができない。しかしながら、神の御霊は、あなたがたのうちに宿っているのだから、あなたがたは肉にあるのではなく、御霊にあるのである。キリストの御霊を持っていない人は、キリストのものではない。[1]」

このように文脈をたどっていくと、ここで言われているのは、クリスチャンのことであって、クリスチャンのことを「もはや肉に従って歩かず、御霊に従って歩くわたしたち」と表現していることがわかります。そして、このような言い方をすることによって、聖化に言及していることがわかります。聖化は義認と不可分であり、義と認められると同時に、聖化は開始されるのです。

クリスチャンとは、実に「肉に従って歩かず、御霊に従って歩く」者たちです。というのは、神の御霊を与えられている者たちだからです。ですから、わたしたちのうちにはいの

ちが与えられ、実質的に変えられ、その変化は人格的に成長していきます。ただ単にキリストの義の着物を着せていただいただけではなく、キリストと結びつけられたのですから、キリストの義も聖も、キリストからわたしたちのうちに流れ込んできています。

ここで、「わたしたちに、律法の要求することが、完全に満たされる」のは、わたしたちが「キリストにある」からとは言わないで、「御霊に従って歩」いているからだと言っているところに、聖化の問題が示されているわけです。律法の要求をわたしたちのうちに完全に満たしてくださるのは聖霊の働きなのです。そして、わたしたちクリスチャンの救いの確かさを保証してくださるのも、聖霊にほかなりません。わたしたちがキリストにあるならば、わたしたちは一点の汚れも罪もない完ぺきな人にしていただくことができます。しかし、それは今この地上においてではありません。このからだが贖われて、救いが完成する時です。[2] 今わたしたちは罪が赦され、律法から自由にしていただくことができました。しかし、やがて終わりの日に、わたしたちは完全に聖くしていただくことができます。「聖くなければ、だれも主を見ることができません。」[3] そのようにしてくださるのは聖霊です。キリストがこの世に来られて、わたしたちの身代わりに、永遠の贖いを成し遂げてくださいました。その永遠の贖いを、わたしたちに適用し続けてくださり、わたしたちの救いを完成してくださるのは聖霊です。

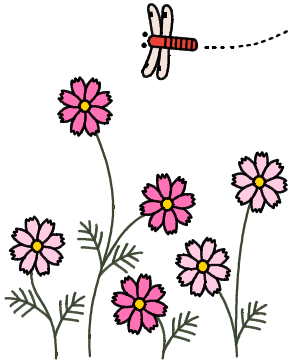
さらに、わたしたちクリスチャンのことを「御霊に従って

歩くわたしたち」と言っているのは、わたしたちが、キリストのなしてくださった贖いの御業を、自分自身に当てはめるべきことを教えています。それは「御霊に従って歩く」という表現の中に示されています。主イエス・キリストを心から信じるということは、御霊の支配下に入るということであり、それは「御霊に従って歩く」ということです。わたしたちの思いも、願いも、行動もすべてがそれまでとは違うのです。ですから、そこに確かに自分の意志と行動において、御霊に従って行くことができます。聖化においては、義認の時のように、ただ受け身でだけいるのではありません。義認の時には、霊的に死んでいたのですから、自分は何一つできませんでした。しかし、聖化はすでに死からいのちに移された者として、志を立て、主のみこころにかなったわざをすることができるようになりましたから、それをしなければなりません。「御霊に従って歩く」と言われているのは、そのためです。しかし、わたしたちに「志を立てさせ、わざを行なわせてくださる」[4]のは御霊の神であって、わたしたちのうちに働いて、そうしてくださいます。ですから、わたしたちは「すべてのことを、つぶやかず疑わずに行な」[5]わなければなりません。そうする時、「非難されるところのない純真な者となり、また、曲った邪悪な時代のただ中にあって、傷のない神の子どもとなり、彼らの間で世の光となって輝く」[6]ことができるのです。このようにできる者とされたことを覚え、心から主をあがめたいものです。

自分の気分や感情ではなく、御霊に従って歩くことができ

る者とさせていただいた神の恵み、そしてそこにこそ救いのゆるぎなさがあるわけです。自分を眺めて、自分はまだすぐ罪を犯してしまうと言って、失望する人は、このことをよく知ることが必要です。神の御子キリストがわたしに代わって律法の要求を完全に満たしてくださったということと、わたしたちが「もはや肉に従って歩かず、御霊に従って歩く」ように変えていただいたということです。ここでは、わたしたちが御霊に従って歩くことにしばしば失敗するかどうかを問題にしているのではありません。わたしたちクリスチャンは、「もはや肉に従って歩かず、御霊に従って歩く」者と変えられたのです。ですから、御霊に従い続けなければならないのです。御霊に従って歩けるようになったという確かさが、わたしたちに御霊に従って歩き続けることができるように励まし、助けてくれるからです。

注(1)ローマ教会への手紙八章五―九節。
(2)テサロニケ教会への第一の手紙五章二三節、ユダの手紙二四節。
(3)ヘブル人への手紙一二章一三節　新改訳。
(4)ピリピ教会への手紙二章一三節。
(5)同書二章一四節。
(6)同書二章一五節。



尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より